

# 鉄輪

世阿弥作

前  
ヲカシ 貴船社人  
シテ 都の女  
男 後  
夫  
ワキ 安倍晴明  
シテ 女の生靈  
季は 地は 京都  
雜

「かやうに候ふ者は。貴船の宮に仕へ申す者にて候。さても今夜不思議なる靈夢を蒙りて候。其謂は。都より女の丑の時参りをせられ候ふに。申せと仰せらるゝ子細あらたに御靈夢を蒙りて候ふ程に。今夜参られ候はゞ。御夢想の様を申さばやと存じ候。

シテ次第

「日も数そひて恋衣。く。貴船の宮に参らん。

サシ「實にや蜘蛛の家に荒れたる駒は繫ぐとも。二道か

くるあだ人を。頼まじとこそ思ひしに。人の偽り  
未知らで。契りそめにし悔しさも。唯我から的心  
なり。余り思ふも苦しさに。貴船の宮に詣でつゝ。  
住むかひもなき同じ世の。内に報いを見せ給へと。  
頼みを懸けて貴船川。早く歩みを運ばん。

下歌

「通ひなれたる道の末。く。夜も糺のかはらぬは。  
思ひに沈むみぞろ池。生けるかひなき憂き身の。  
消えん程とや草深き。市原野辺の露分けて。月遅

上歌

き夜の鞍馬川。橋を過ぐれば程もなく。貴船の宮に着きにけり。く。

詞  
「急ぎ候ふ程に。貴船の宮に着きて候。心静に参詣申さうずるにて候。

ヲカシ  
「如何に申すべき事の候。御身は都より丑の時参り

召さるゝ御方にて渡り候ふか。今夜御身の上を御夢想に蒙りて候。御申し有る事ははや叶ひて候。鬼になりたきとの御願にて候ふ程に。我屋へ御帰

りあつて。身には赤き衣を着。顔には丹を塗り頭には鉄輪を戴き。三つの足に火を灯し。怒る心を持つならば。忽ち鬼神と御なりあらうずるとの御告にて候。急ぎ御帰りあつて告の如く召され候へ。なんぼう奇特なる御告にて御座候ふぞ。

ヲカシ  
シテ詞  
「いやくしかとあらたなる御夢想にて候ふ程に。  
「是は思ひもよらぬ仰にて候。わらはが事にては有るまじく候。定めて人違にて候ふべし。

御身の上にて候ふぞ。かやうに申す内に何とやらん恐ろしく見え給ひて候。急ぎ御帰り候へ。

シテ  
「是は不思議の御告かな。先々我屋に帰りつゝ。夢想の如く為るべしと。

地  
「いふより早く色変はり。く。氣色変じて今まで  
は。美女の形と見えつる。緑の髪は空ざまに。立  
つや黒雲の。雨降り風と鳴神も。思ふ中をば避け  
られし。恨みの鬼と為つて。人に思ひ知らせん。

憂き人に思ひ知らせん。 (中入)

男詞  
「かやうに候ふ者は。下京辺に住居する者にて候。  
我此間うち続き夢見悪しく候ふ程に。晴明の許へ  
立ち越え。夢の様をも占はせ申さばやと存じ候。  
如何に案内申し候。

「誰にて渡り候ふぞ。

男  
「さん候下京辺の者にて候ふが。此程うち続き夢見  
悪しく候ふ程に。尋ね申さん為めに参りて候。

ワキ

「あら不思議や。考へ申すに及ばず。是は女の恨みを深く蒙りたる人にて候。殊に今夜の内に。御命も危く見え給ひて候。若し左様の事にて候ふか。

男「さん候何をか隠し申すべき。我本妻を離別し。新しき妻を語らひて候ふが。若し左様の事にてもや候ふらん。

ワキ「實に左様に見えて候。彼者仏神に祈る数積つて。御命も今夜に究つて候ふ程に。某が調法には叶ひがたく候。

男「是まで参り御目に懸り候ふ事こそ幸にて候へ。平に然るべき様に御祈念有つて賜はり候へ。

ワキ「此上は何ともして御命を転じかへて参らせうずるにて候。急いで供物を御調へ候へ。

ワキ「いでく転じかへんとて。茅の人形を人尺に作り。夫婦の名字を内に籠め。三重の高棚五色の幣。おのく供物を調べて。肝胆を碎き祈りけり。謹上

再拝。夫れ天開け地固まつしよりこのかた。伊奘諾伊奘冊尊。天の磐座にして。みとのまくばひ有りしより。男女夫婦のかたらひをなし。陰陽の道ながく伝はる。それに何ぞ魍魎鬼神妨げをなし。非業の命を取らんとや。

「大小の神祇。諸仏菩薩。明王部天童部。九曜七

星二十八宿を驚かし奉り。祈れば不思議や雨降り風落ち。神鳴り稻妻頻りに満ち満ち。御幣もざざ

めき鳴動して。身の毛よだちて恐ろしや。

後ジテ

「夫れ花は斜脚の暖風に開けて。同じく暮春の風に散り。月は東山より出でゝ早く西嶺に隠れぬ。世上の無常かくの如し。因果は車輪の廻るが如く。我に憂かりし人々に。忽ち報いを見すべきなり。恋の身の浮ぶ事なき鴨川に。

地  
「沈みしは水の青き鬼。

シテ  
「我は貴船の河瀬の螢火。

地 「頭に戴く鉄輪の足の。

シテ 「焰の赤き鬼と為つて。

地 「臥したる男の枕に寄り添ひ。如何に殿御よ珍らし  
や。

シテ 「恨めしや御身と契りし其時は。玉椿の八千代二葉  
の松の末かけて。変はらじとこそ思ひしに。など  
しも捨ては果て給ふらん。あら恨めしや。捨てら  
れて。

地 「捨てられて。思ふ思ひの涙に沈み。人を恨み。  
シテ 「夫をかこち。

地 「ある時は恋しく。

シテ 「又は恨めしく。

地 「起きても寐ても忘れぬ思ひの。因果は今ぞと白雪  
の。消えなん命は今宵ぞ。痛はしや。

地 「悪しかれど。思はぬ山の峰にだに。く。人の歎  
きは生ふなるに。いはんや年月。思ひに沈む恨み

の数。積つて執心の。鬼となるも理や。

シテ  
「いとく命を取らん。

地  
「いとく命を取らんと。しもとを振り上げうはなりの。髪を手にからまいて。打つや宇津の山の。夢現とも分かざる憂き世に。因果は廻り合ひたり。今更こそ悔しかるらめ。さて懲りや思ひ知れ。

シテ  
「殊更恨めしき。

地  
「殊更恨めしき。あだし男を取つて行かんと。臥したる枕に立ち寄り見れば。恐ろしや幣帛に。三十番神ましくて。魍魎鬼神は穢らはしや。出でよくと責め給ふぞや。腹立や思ふ夫をば。取らであまさへ神々の。責めを蒙る悪鬼の神通。通力自在の勢絶えて。力もたよくと足弱車の。廻り逢ふべき時節を待つべしや。先此度は帰るべしと。いふ声ばかりはさだかに聞えて。いふ声ばかり聞

えて姿は。目に見えぬ鬼とぞなりにける。目に見えぬ鬼となりにけり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第二輯」大和田建樹著